

第2分野(地球領域)改訂のポイント

●変更点の概略

	現行学習指導要領	新学習指導要領
第1学年	(2) 大地の成り立ちと変化 ア 火山と地震 イ 地層の重なりと過去の様子	(2) 大地の成り立ちと変化 (新規) (ア) 身近な地形や地層, 岩石の観察 (イ) 地層の重なりと過去の様子 (ウ) 火山と地震 → (移動) (エ) 自然の恵みと火山災害・地震災害 (地球規模のプレートの動きを含む)
第2学年	(4) 気象とその変化 ア 気象観測 イ 天気の変化 ウ 日本の気象	(4) 気象とその変化 (ア) 気象観測 (移動) 圧力・大気圧 ←→ (← 1年1分野(1)より) (イ) 天気の変化 (ウ) 日本の気象 → (移動) (エ) 自然の恵みと気象災害 (← 3年2分野(7)より)
第3学年	(6) 地球と宇宙 ア 天体の動きと地球の自転・公転 イ 太陽系と恒星 (7) 自然と人間 ア 生物と環境 イ 自然の恵みと災害 (一部移動) (ア) 自然の恵みと災害	(6) 地球と宇宙 (ア) 天体の動きと地球の自転・公転 (イ) 太陽系と恒星 (7) 自然と人間 (ア) 生物と環境 → ㊦ 地域の自然災害

1

第1学年「(2) 大地の成り立ちと変化」のポイント

【主なポイント】

- ・「(ア) 身近な地形や地層, 岩石の観察」の新設
- ・「(エ) 自然の恵みと火山災害・地震災害」が, 第3学年「(7) 自然と人間」から移動

【思考力・判断力・表現力等のポイント】

「問題を見いだし見通し」をもって調べることについて学習指導要領解説では, 地域の露頭観察などで構成物の違いや地層の広がりについて問題を見いだすことやいくつかの火山の比較から問題を見いだすことが例示されている。また, 「規則性」については, 地層の重なり方や広がりや地震の揺れの大きさや伝わり方が, また「関係性」については, 地下のマグマの性質と火山の形の関係が例示されている。

(ア) 身近な地形や地層, 岩石の観察

項目としては新設であるが, 現行学習指導要領で各項目

に記述されていた地層の観察, 岩石の観察を統合し, 基礎技能の習得も含めた導入課題としたものである。野外観察という文言が削除されており, 地域の特性, 実情に合った観察を実施したい。

(イ) 地層の重なりと過去の様子

野外観察が簡略化されて分離している以外に, 「新生代の第三紀及び第四紀」が「新生代」と簡略化されている。第三紀が, 古第三紀と新第三紀に分離されたことなどが影響していると思われる。

(ウ) 火山と地震

この項目については, 「(イ) 地層の重なりと過去の様子」との順序が逆になっているが, そのことにあまり大きな意味はないと考えられる。それ以外に, 内容の取扱いで「地球規模でのプレートの動きにも触れること」と「津波発生のしくみについても触れること」が追加されている点に注意が必要である。「地球規模でのプレートの動き」は, 第3学年「(7) 自然と人間」からの移動である。

(エ) 自然の恵みと火山災害・地震災害

この項目全体が、第3学年からの移動である。火山の噴火や地震などの地質活動が、人間に恵みとともに災害をもたらすことがあるという自然の二面性について、第1学年で扱うことになる。単元の学習内容と関連付けながら、火山の噴火や地震が起こった場合に、どのように情報を収集し、どのような行動をとらなければならないか、的確に判断できるようにしていきたい。

2

第2学年「(4) 気象とその変化」のポイント

【主なポイント】

- ・「圧力・大気圧」が、第1学年「(1) 身近な物理現象」から移動
- ・「(エ) 自然の恵みと気象災害」が、第3学年「(7) 自然と人間」から移動

【思考力・判断力・表現力等のポイント】

「見通しをもって解決する方法を立案」して調べることにについて学習指導要領解説では、継続的な気象観測において、気象要素間の関係を検証する観測を計画することが例示されている。また、「規則性や関係性を見いだして表現する」ことについては、天気の変化や日本の気象が題材として例示されている。

(ア) 気象観測

ここでは、新たに「圧力・大気圧」について扱うことになる。気象に関する単元であるので、大気圧と関連付けながら、圧力について扱う必要がある。苦手な生徒の多い項目でもあるので、丁寧な指導が必要である。なお、「水圧・浮力」については、第3学年「(5) 運動とエネルギー」で扱うことに注意したい。

(イ) 天気の変化、(ウ) 日本の気象

この項目には、内容の取扱いも含め、変更はない。

(エ) 自然の恵みと気象災害

この項目全体が、第3学年からの移動である。気象現象が人間に恵みとともに災害をもたらすことがあるという自然の二面性について、第2学年で扱うことになる。単元の学習内容と関連付けながら、気象災害が予測される場合に、どのように情報を収集し、どのような行動をとらなければならないか、的確に判断できるようにしていきたい。

3

第3学年「(6) 地球と宇宙」のポイント

【主なポイント】

- ・「惑星の見え方」を「金星の見え方」とし、太陽系の構造と分離

【思考力・判断力・表現力等のポイント】

「探究の過程を振り返る」ことについて学習指導要領解説では、金星の見え方を調べる際に、太陽と金星の位置関係に着目したモデル実験に対して、実験方法や考察の妥当性を振り返らせることが例示されている。

(ア) 天体の動きと地球の自転・公転

この項目には、内容の取扱いも含め、変更はない。

(イ) 太陽系と恒星

これまでは、惑星の見え方を太陽系の構造と関連付けていたが、今回は、太陽系の構造と惑星の見え方が切り離され、金星の見え方が、月の見え方と統合された。

4

第3学年「(7) 自然と人間」のポイント

【主なポイント】

- ・「イ 自然の恵みと災害」の「自然の恵みと火山災害」「自然の恵みと地震災害」が、第1学年「(2) 大地の成り立ちと変化」に移動
- ・「イ 自然の恵みと災害」の「自然の恵みと気象災害」が、第2学年「(4) 気象とその変化」に移動

【思考力・判断力・表現力等のポイント】

「自然環境の保全と科学技術の利用」においては、第1分野、第2分野を総合して多面的に考察し、科学的な根拠に基づいて意思決定させることが重要である。

(ア) 生物と環境 ㊦ 地域の自然災害

現学習指導要領「イ 自然の恵みと災害」の大部分の内容は、第1学年、第2学年に移動し、地域の自然災害についての調べ学習（自然の恵みについては対象外）が中心となる。中項目から小項目への変更があり、「(ア) 生物と環境」に編入された。これまでの学習内容をもとに総合的に調べ、自然と人間の関わり方について認識することが求められる。